
象徴 ～シンボル～

天タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

象徴 ～シンボル～

【Nコード】

N7579K

【作者名】

天タカ

【あらすじ】

10年ぶりに自分の家に帰ってきた上村 喜一は、そこで「シンボル」とゆう力を手にすることになる…

そして絵本に秘められた裏の物語とは

初めて書く小説なので、感想 評価お願いします。

第0話 絵本 『空へ』（前書き）

初めて書くので、下手だと思っし、ベタだし、つまらないとおもいますが、精一杯頑張りたいので、よろしくお願いします

第0話 絵本 『空へ』

このお話は昔の話かもしれないし、今の話かもしれない。それとも、未来の話かもしれません…

あなたのための物語かもしれないし、どっかの誰かの物語かもしれない…

そんな

そんな物語…

「第0話…絵本 『空へ』」

ある村に一人の子供が、幸せそうに暮らしていました…

その村の近くには天にも届きそうな山があり、そこには神さまが住んでおりました…

その子供は神さまの近くに行き、「神さまはいつも一人で可哀想…自分の幸せをわけてあげる。」

その子供は自分の幸せを共有する力を持っていたのです…

幸せを共有することで神さまを皆の輪の中に入れてあげようとしたのです…

でも、神さまにはそれができませんでした…

神さまは怒り、その子供の村を壊してしまいました…

子供は一人になり、孤独を知りました。

子供の心のなかには悲しみでいっぱいになり、その悲しみは空にも届き、空も涙を流しました…

子供は幸せを探す旅に出ました…

子供は、さまざまな場所を歩き、さまざまな場所に行きましたが、幸せにはなれませんでした…

空はそんな子供のことをあわれみ、自分の所にくるように言いました…

子供には翼がはえ、空と1つになり幸せになりました…

第1―1 帰還

昼の12時ちょっとたった頃

上山駅東口

迎えの車も、人もいない…

「熱い…」

時期的には夏休み終わり頃。まだ夏の暑さは、この上山市を包んで離さない

迎えはない…

「ったく。兄貴に連絡したのにな…留守電にだけど…」

転校手続きなど、その他諸々を兄貴にしてもらったので、俺が来ることぐらいあの人は知ってるはずだ…今日来ることも伝えてる…留守電にだけど…

「はあゝ。来ないってことは、留守電聴いてないか、仕事が忙しいのか？」

てゆうか、何の仕事してるか、知らねえし…」

一瞬二丁の兄貴を想像したが、あの人に限ってそれはないと首を振る

めんどいが、行くしかない。来ないのだから…

「はあゝ。」

ため息がでる。

この上山市は中心街は都会っぽく、周辺はひどく寂れている街だ。

喜一の実家は、周辺地帯にある…といっても、静かで良いところだし、自然に囲まれ、中心街にも遠くない

昔から大好きな場所だった…

進むにつれて、見覚えのある景色が広がる… 皆で遊んだ場所… 10年前なのに鮮明に蘇る… 歩いてきて良かったと思う

あの頃は幸せだった…

オバサンの家でも、楽しかったと言えば楽しかったが、あそこは孤独を余計に感じるから、嫌いだった…

11年前の大地震で両親は行方不明になり、妹は死んだ… 兄貴はなんか…冷たくなった

家の前に着くと、懐かしい上村とゆう名札を見つけた…

家にはカギがかかっていた

どうやら兄貴は居ないらしい…少しホッとしてる自分がいた

合い鍵は昔の場所のままだった…

妹の優が、気に入ったカップパの人形の皿の下にあった

家に入ると記憶のとおりで、少し涙が出た…

玄関で深呼吸をして

「ただいま…」

そう呟いた…

家に帰ってきたと、久しぶりに感じた

第1―2 兄

もし、この世界に存在する罪に色があるなら…

俺の色はきつと黒

決して薄まらない黒

赦されることなき黒

そんな俺に赦されることはただ1つ

誰かに救われる夢を視ること

たとえその人がどんな色をしていても…

第1―2 『兄』

時刻はもうすぐ12時になろうとしている

今日は10年ぶりに喜一が帰ってくるらしい…

「迎えにいかうか…」

ふと、そんなことを呟く

もう戻れない関係だとゆうことは解ってる…

しかし、時間の流れが俺の罪を薄めてくれるかもしれない…

あいつは知らないだろうが、俺の罪は重い…何度も幸せだったあの頃を思い出してしまっ…

その時携帯が鳴った

「はい、上村ですが…
今現場にいきます。」
そうですか…有田が…解りました。

車を走らせること20分 上山市中心街の路地裏

既に何人も警察が到着している

「またか…クソッ」

ベテランの風格漂わせる刑事の岩田が呟く

そこに一人の男が到着した上村空とかゆうまだ若い小僧だ

この男がうちの署にきてからろくなことがない

「状況は？」空は岩田に聞いた

「永山は、いつこうに目を覚ましません… 原因は不明。前の二人と同じ症状です 上村さん…あんた永山に何させてたんすか？」

「家族にはいつもの通りに伝えてください。現場の処理は岩田さんにまかせます。私は急ぎの用ができたので…」

そう言っ、その場を去る

「ちよっ、右席殿」

岩田が空を呼び止める。右席とは空が所属している組織の名だ
「あんた…いつたい何やってんすか？我々には何の情報もない、

部下はどんどんやられてく… これで三人たぞ。あんた…」

「すみません。今は何も話せません…」

そう言って、空はその場を去った

「クソッ」

今日二度目になるセリフを岩田は呟いた…

空は同僚に連絡をとっていた

「村田か… 今日例の娘を張り込ませていた永山さんがやられた…
恐らく、奴らの仕業だ。あの娘の場所を今すぐにだ！」

電話先の男は軽い調子で

「今日の上村さん怖いですね… 2 3分待つて下さい。すぐに
特定します。」

「村田！速くしてくれ！」

「解ってますよ……」

見つけました！場所は上山映画館のすぐ脇の路地裏です！ ヤバ
い！既に接触しています！」

それを聞きハンドルのきる空の顔には明らかな焦りがあつた

あそこなら、ここから遠くない… 間に合え！

上山映画館の近くの路地裏…人の多い映画館前とは違い人はま
ったくない

そこに二つの影があつた一人はグツタリとしている

もう一人は手に半透明で黄色く輝く剣のようなものを持ち、グツ
タリとしている女に刺している。が、女の刺されてるはずの場所か
らは血が出ていない…

「はあ はあ はあ
」

男の息は荒い

いい調子だ…このままいけば…

その時近くに人の気配がした

周りを見ると、一人の男がこちらに走ってくる

確か…あの男は…

上村は路地裏について、すぐに二つの影を見つけた

一人は既にグツタリとしている

もう一人の男のほうには、疲労の色が見える。

見るからに長時間女に干渉していたのがわかる。

あの娘の精神はもう無理かもしれない…

だが！

そう決心して、空は顔の前に手を重ねる。

そして、一気に下に引く抜く…

すると、空の顔に蒼く輝く半透明の仮面が生まれた…

「お前、上村空か？お前を連れてくるように命令されてもいる…一緒にきてもらうか？」

男は女から剣を引き抜きながら、威嚇してくる。

「誰の命令だ？」

「知ってるだろ？」

だから、お前は戦ってる」

数秒睨み合う二人…

刹那

二人の力がぶつかる

路地裏の景色が少しかわる

電柱は不自然にネジまがり、コンクリートでできた足元にはひび

が入る…

二人の力は拮抗しているかに見えたが、男に限界がやってきた

クソッ！強い…力を長い間使って疲労していたとはいえ、コイツは強い…

一人では勝てないだろう

あの女からこれ以上『あれ』に干渉することはできない

逃げるか…

そう考えているとき、空に明らかな変化があった。手に力を蓄えているのか、左手が蒼く輝いてる

「ヤバッ！」

逃走モードに入ろうとしたが、少し遅かった。

空はためた力を男に放った…

空は女の様子を調べていた。回復には時間がかかるが、なんとか無

事だった。

男には逃げられた。手応えはあったが、逃げられたと言つ自覚も
あった。

あいつらは俺を欲していた。何故だ？

思い至るものは1つしかなかった…

第1―3 覚醒

あなたから見た私

私の中の私

家族から見た私

友達から見た私

全ては私の姿だけど

どれが本当の私なのか

知ることとは生きること

知ってしまえば

死んだも同じ

第1―3 『覚醒』

上村家では喜一が夕食を作りながら、兄の帰りを待っている。

期待と不安が胸の中で渦巻く、兄との生活もだが、今は新しい学校だ。

まずは第一印象が重要だ！

『ども。上村喜一です。夏休みも終わり皆さんさぞ憂鬱な気分でしょうかね』

ところで聞いてくれよ、ジョン（？）夏休みにさくしぶりに兄貴の所に帰って来たのに、兄貴のやつ迎えにもこないんだぜ！

なんじゃそらや！』

……明らかに違う

面白くもないし、無駄にテンション高いし、ジョンって誰だよ！しかし、新しい学校とはいえ、なめられるわけにもいかない

『ちより〜す！上村喜一ッス！てゆうか、マジで友達たくさんほしいんで、よろしく〜』

……違うだろ……

これじゃおかしいだろ……今時ちより〜すってなんだよ！

そしてまたテンション高いし！

……

「上村喜一だぞ！仲良くしてくれなきゃ、。に変わってお仕置きよー！」

とキメポーズを極める。完璧だぜ！へへッ！

「何をやってるんだ喜一……昔とは少しキャラがかわったな……」

「……………」

兄貴が帰って来てた

キメポーズもしっかりみられた…

さらに、冷静なツツコミは意外と心にしみる…

10年ぶりに再会した、最初の言葉は『お仕置きよ』だった

夕食…兄貴に手伝ってもらい料理は完成した。
やはり兄貴は料理もうまく、食べると旨かった。

「兄貴は今日遅かったけど、やっぱり仕事？」

「ああ……」

「何の仕事をしてんの？」

「警察だ……」

「へえ」

初耳だった。兄貴が警察なんて…

意外と似合いそうだな…

「帰りは遅くなる。俺のぶんの夕飯はいらない。朝は俺が作る。
コミは置いとけ。質問は？」

「いやない…」

「ごちそうさま。悪いが、食器片付けてくれ。」

「ああ」

空は部屋を出た

喜一は少し俯いた…

突然空が戻ってきて、

「飯旨かったぞ…手料理なんて久しぶりだった」

空はそう言っていると部屋を後にした

喜一は顔を上げたまましばらく動けなくなった…

「今思つと、兄貴も手伝つたし…」

食器を洗い、台所を片付けて、風呂に入り、今は部屋でごろりと

している。

今だに空の言葉が頭の中残っていた…

眠れないので外で歩くことにした…

10年ぶりとはいえ、あまり変わってない風景を見てホッとした。

しばらく歩くと、消えかかっている街灯をみつけた。

よく見ると、街灯の下に女の人がたっている…なんかめっちゃくちゃこつちを視てる。

近く通りすぎようとするときもこつちを視てる。

「あの〜」

声をかけた途端にその女の人は空気のように消えた。

背筋にぞわ〜とした感覚が通り抜ける。

嫌な汗をかいている。

いろいろ不気味な感じだったが、まさか幽霊だなんて…

いや、俺は信じない、幽霊なんて科学的根拠のないものなんて俺は信じません！アトランティスはあると信じているがな！このやろ！

「ウオオオオ！」

隣の誰も居なそうな小さな廃ビルのなかからうめき声が聞こえてきた。

「うひいっ！」

思わず変な声を出してしまった。

本当なら、今すぐ帰りたところだが、先ほど幽霊を否定しているため、

これは、誰かがきつと苦しんでるに違いない！違いない！違いない！
い！

無理やり自分に必死に言い聞かせ、廃ビルの中に入っていった：

中を進んでいくと、本当に人がいて、本当に苦しんでいた。

ほらな！幽霊なんて居ないんじゃない！

「ウオオオオ！」

「ひいひい！」

男のうめき声と喜一の悲鳴が合わさった。

よく見ると、血が出てる。この傷は数時間前に喜一の兄である空に先程の戦闘で負った傷だとはもちろん喜一は知らない。

「あゝ。大丈夫ツスカ？」

と男に近づいたとき、ひときわ大きいうめき声を男が挙げるともに、この男を本当に苦しめているものが現れた。

それは、先程男が戦闘に使っていた黄色く輝く剣であつた。

剣は男の腹のあたりに刺さっているが、腹からは血がでていない。

「ど、どうしたんすか！それ！」

と言つた途端に剣に変化があつた。

剣を中心に小さな刀がいくつも出現し、その切っ先を喜一に向けている。

ヤバッ！

そう思つたときには、動いていた。

一本の刀が飛んできて、それを喜一はかわす。刀はコンクリートにめり込み、ひびが入っている。

ぞつとした。

次は二本同時にとんできた、ギリギリかわすことができたが、バランスを崩した。

その隙を見逃してはくれず、二本の刀が飛んでくる。

死ぬ。

そう思った目を瞑った…

痛くない…てゆうか、刺さってない…

目を開けると、二メートルもの半透明の紫の巨人が刀から喜一を守ってる。

その巨人の手には大きな十字架が握られている

その巨人は『戦う者』を象徴し、十字架は『救済』を象徴している。

巨人は男に刺さっている剣に向かっていった。剣は刀を出現させ、巨人に攻撃を仕掛けるが、巨人は手にしてる十字架を剣のように使い刀を払い、男に刺さっている剣を十字架で断ち切った。

剣はあの女の人のように、空気のように消えていった。

それと同時に巨人も消えてしまった。

苦しんでいた男は、苦しみが消え去った事と解放感で驚いていた。

「うそ…」

男が呟いた。

虫がよく鳴く暑い夜の出来事だった。

喜一は呆然としていた。

突然、廃ビルが強い光に当てられる。

それが、車のライトだと気付くのに少しかった。

三人の影が車から降りてきた。

「一護は回収。このガキは消せ」

「了解」

よく虫の鳴く暑い夜だった。

第2―1 アンチ・スカイ 優夢編

俺は唯孤独

悲しみも

悦びも

怒りも

俺だけのもの

目指すべきものは唯1つ

孤立すること…

畏れることは唯1つ

何かに執着してしまうこと…

第2―1 『アンチ・スカイ 優夢編』

「一護は回収。このガキは消せ」

三つの影の中の二番目に背が高い影が言った。声質からして、男だとわかる。

「了解」

他の二つの影が応えた。どうやら女も居るようだ。

三つ影は喜一が入ってきた入り口から現れたので、あそこから逃げることは出来ない。

他に出口があるかどうか知らないが、今こいつらから逃げたほうがいいのは明らかだった。

取り敢えず、ビルの奥に逃げていく。

「どうする？」

一番大きな影が質問した。どうやら男のようだ。

「目撃者がいる事事態今の俺達にはマイナスにしかない。まみ、頼む。」

「わかったわ。あなたたちも気を付けて。」

そう言って、まみと呼ばれる女は喜一を追うために奥に走っていった。

喜一は走った。が、出口らしい場所は見つからない。

「くそっ」

あそこしか出口がなかったら絶望的だ。

突然、空気を切る音がした。同時に隣にあった柱に何かめり込む凄

まじい音がビルに響く。

見ると、柱に蒼白い矢のようなものが刺さっていた。

後ろを振り替えると、女が立っていた。黒い長髪でオールバックにしている。しかし、そんな女には似合わないものを持っていた。蒼白く輝く弓のようなもの。

喜一の顔がひきつる。逃げようとしたが、足が震えて動かない。「あら？震えているじゃない。かわいいっ。」

そのセリフからこの女がSなのは明らかになった。

「うるせえ！これは、あれだ！武者震いってやつだ！きっと！たぶん……」

「最後に言い残すことはある？」

「できたら、苦しくないんで……」

「残念ム・リ！　テヘッ」

と言つて弓の標準を足に向けた。どう考えても急所を外す気満々だ。

「最悪だ〜！このどSばあー！」

「楽に死にたいなら、今Mになることお薦めするわ。」
と言つて弓を引き、放つ。

もうちょいかつこいい死に方が良かったな…兄貴俺火葬にしれく

れ。

しかし、弓は弾かれる。驚くまみ。

そして巨人が出現する。やはり十字架を持っている。

「デュアル・シンボル!!」

まみの顔には明らかに焦りが出ていた。

女の言ってることは解らないが、こいつ出てきてとりあえず、ホッとする。

そもそもこれ何だよ…

安心したのか、喜一に当たり前の質問が頭をよぎる。

そんな喜一に反応したのか、巨人はこっちを見てきた。

まみは巨人を驚きの目で見ていた。

巨人と十字架から感じるシンボルは明らかに違うものである。デュアル・シンボル。初めて見る…

まみがどうするか迷っていると、巨人は喜一を掴み、廃ビルの壁を壊し外へ逃げていった。

まみはしばらく動けなかった。

廃ビル入り口付近

「ほら、鎮静剤だ。」
と言つて謎の薬を男に手渡す。

「で、どうだったんだ。あの女は。」
一番大きな男がしゃべる。この男の名は花村。

「いや、あの女じゃない…確かにいままでとは、干渉レベルは格段に高くなつたが、あれじゃまだ無理だな。」
と言つて手渡された薬を飲むこの男は一護と言つ。

「まだリストアップされてる人間はまだいる。行くぞ」

先程からリーダーのようなこの男は優夢。

「待て。その女の近くに刑事がいた…三人潰したが、たぶん奴らも何らかの方法で俺達に近いリストを持っていてるだろうな。それに、上村空に会つた」

優夢と花村が驚く。

「それは本当か？一護。」

花村は明らか動揺している。

すると、奥から足音が聞こえてきた。

「遅かったな。お前なら……どうした？何かあったのか？」

優夢はまみの顔見て、質問を替えた。

「デュアル・シンボルを持ってた。さっきのガキ。」

「それは、本当か？まみ！」

優夢の顔は興奮していた。

「リストアップされてないから。ドールがまだ調べてない者が……」
優夢はぶつぶつと喋っている。

29

「とりあえず、伊藤さんに報告したほうが……」
花村が遠慮がちに優夢に提案する。

「そうだな……帰ろう。」

彼らに乗せた車は闇の中に消えていった。

ある程度ビルから離れると巨人は消えた。

そこから、意識が朦朧しながらも、家に辿り着く事ができた。

部屋に入り、パニックした頭を整理するために、独り言を無意識に
してしまう。

明日は始業式だが、喜一の頭の中にはそんな事は消え去っていた。

喜一が帰ってくる音がした。空ははめている腕時計を見ると0時
を過ぎていた。

どこに言ってたのか。喜一に聞くために喜一の部屋の前に行き、

ノックしようとした。

そのとき、喜一の部屋から独り言が聞こえてくる。

空には、喜一の独り言がまるで二人話しているかの様に聞こえた。

途端に体動なくなる…

それは、自分の中に重い罪悪感を感じたからである。

それでも、日は昇る。何事なかったかのような朝を迎えた。

第2―2 夏休みの憂鬱 吉田 修平編（前書き）

この話はこの物語の登場人物の吉田 修平の物語です。本編とはあまり関係ないし、短いので、まあ、一話、一話自体短いのですが、時間があるときにでもみてください

第2―2 夏休みの憂鬱 吉田 修平編

その手をひらいてはいけない

きつと何かを離してしまうから…

その手を伸ばしてはいけない

そこには何もないのだから…

第2―2 『夏休みの憂鬱 吉田 修平編』

夢を視ていた…

懐かしく…

哀しく…

儚く…

だから、この夢は嫌いだった。

この夢の主人公は儚く楽しい夢を見た後…

孤独を知るのだから…

その手を離してはいけない…

だから、この夢は嫌いだった…

「はがつ！」

暑く、ダルく、憂鬱な夏休み最後の日を吉田 修平はこうして迎えた

それにしてもダルい、暑い、そして夏休み最後の日は憂鬱だ
ここは私立上山桜丘高等学校の第2学生寮

とりあえず、飯を食うために下に降りる。

この学生寮は四階建てで、一階は共同フロアとして解放

二階以上は学生用の部屋になっている。

人間関係を創りやすいように設計されたデザインとかなんとか…
ちなみに男女共同であるが、部屋は東棟と西棟に分かれ、お互い
に入れないようになっている。

簡単な話…不純異性交遊はいけません！な設計になっている

下に降りると、見慣れた顔が2つあった。

一人は寮監である村田さんである。もういい歳なのに恋人がいな
いらしい、まあ俺もだが…

流石は、不純異性交遊 ダメ 絶対の学生寮の寮監である。

普通にいい人なだけだなあ…

「あつ おはよう修平君！ 朝ごはんってゆう時間じゃないし…
奈々ちゃん…あつ アハハハハハハ」

村田さんは突然笑いだした。この笑いは、面白い笑いではなく、

恐怖とそれがもたらすであろう圧倒的な暴力を怖れる笑いだ…

よく見ると、テーブルにたくさんのお菓子を重ねてあり、もう一人の見慣れた顔がガツガツ食っている。

こいつは幼なじみの神山 奈々…昔からいいやつで仄かに想いを寄せているが、当のコイツは俺の事を何とも思っていない…

昨日だって…昨日…きのう…き…

時計を見る。もうすぐ12時になる。

昨日コイツと買い物に付き合う約束をしていた。あの夢のせいですっかり忘れていた。

奈々は嫌な事があると大好きなお菓子を食べあさる…昔は観えて、可愛らしい光景だったが、今はその食い様ときたら何だろう…肉食恐り…

「何ぼへ〜っとしてんのよ…とりあえずここに座って。」

従うしかない。絶対王政の始まりを告げていた…

「約束したよね。買い物に付き合っつて!」

ちなみに、約束をした後 修平は幸せな気持ちでいっぱい夜なかなか寝付けなかった…

だって、好きな女の子から買い物付き合っって言われたら、デートですか?デートですか?みたいになるじゃない!少なくとも修平はなっ…

そして今に至るわけだが…

「悪かった…悪かった。かわりに、何でも言っこと聞くからさ…
なっ！」

修平は手のひらを重ねて、御免なさいのポーズをとる

「なっ！なっ！そ、そんなの当たり前じゃない！ バーカ！ 変態！」

すると、寮監の村田さんが奈々に耳打ちをした途端に奈々は慌てだし、村田さんをボッコボコにした。

その後こちらを睨み付け

「40秒でしたくしな！」

と修平に命令をして、共同フロアを出ていった。

「俺はどこのパズーだよ…」

修平は呟く。

今日は夏休み最後の日

だけど、楽しくなりそうだった…

第2―2 夏休みの憂鬱 神山 奈々編（前書き）

前話と同じで、話にまったく関係のなさそうな話です。読まなくても、結構です。

第2―2 夏休みの憂鬱 神山 奈々編

美しい声

まぶしい笑顔

暖かな温もり

私はただ愛に恋い焦がれている…

第2―3 『夏休みの憂鬱 神山 奈々編』

夏休み最後の日

今日は幼なじみの吉田 修平と一緒に買い物に行く日だ

「フン♪フン♪フン♪」

思わず鼻歌を歌っているこの女の子は神山 奈々。
上機嫌である。

昨日修平と何とか買い物に一緒行く所まではこぎ着けた。

後は普段アイツには見せない姿を見せて、私の女の子らしい所を見せつけてやれば…

「フフフフ」デートだなんて、修平ったら気が速いんだから
「
昨日修平を誘った時の事…」

「まっ、まさか！デートとかなのか！それは！」

そこで、奈々が抱いている気持ちを素直に伝えれば良かったものを…

「な、何がデートよ！ただの荷物持ちに決まってんでしょ。明日は皆忙しそうだし、誘いやすそうな相手が修平しかいなかったから…」

「そうか…そうだな」

明らかにテンションが下がっている修平。

「じゃ、8時半に共同フロアに集合てことでいいんだな」

「うん…」

修平は去ってゆく…

いつもの通りに強がってしまった。

あそこで素直にデートです。なんて言っていたら、そのまま付き合う感じになれたかもしれないのに…

思わず、壁に頭を叩きつける。

友達がそれを見て

「また強がって変な事言ったの？」
少し呆れつつも友達は奈々の動きを止める。

この友達の名は石川 陽子。

奈々の友達で修平と奈々の関係をよく知っており、奈々の相談にもよく乗っている。

ちなみに、「修平をデートに誘う大作戦」を決めたのも陽子である。

ノリで言ってみた作戦が奈々にヒットしたらしく、非常に食いつきが良かった。

「まあ、落ち着きなさいよ…強がっちゃったとはいえ、誘うことは出来たんでしょ？あんたがそこまで出来たら上出来よ。」

正直、奈々が誘うなんて出来ないと思っていた。

本当に上出来くらいだ。

必死に自分の中で誘うシュミレーションをして、恥ずかしさのあまり先のばしにした結果、デートできるのが夏休み最後の日しか残ってなかったのは置いとくとする。

この作戦は夏休み前には出来ており、それほど長い間恥ずかしさと闘っていた奈々の気持ちを考えれば、相当なものであることは想像しやすい。

正直、早く付き合えよ…とか陽子は思っていた。

二人は観ていて、お似合いだと思うし、修平が奈々に好意を寄せていることは明らかで、奈々も修平の事を好いている…

先程も、あんなに修平がさりげなく奈々に好意を伝えてるのに、毎回奈々が強がって変な事言ってるのだ。

修平可哀想…けどわかってあげて…奈々も頑張っているから！

正直、もうめんどくさい陽子であった。

まあ、そんな事もあり、現在朝の5時ちょっとぐらい。

万全の状態で出陣するために朝早くおきて、準備をする。

修平が自分の事を好いているのは、知っている。私も修平の事が好きだ。大好きレベルである。

しかし、そんな気持ちが自分の中にあるのが恥ずかしくて、つい強がってしまうのだ。

今日こそは！今日こそは告白してみせる。

そう気合いを入れて、頭の中で告白する方法をシュミレーションする。後は素直になるだけだ。

思わず、ニヤニヤしてしまう。

こんな顔見られたらどうしよう…

そんな事を思いながら、最初にどこに行こうか考えている。

今日は夏休み最後の日…何だか楽しくなりそうな予感がしていた。

共同フロアで寮監である村田さんになだめられながら、半泣きになりつつも、肉を喰らう肉食恐竜の如くお菓子を食べている奈々の姿を見て、あきれて深い溜め息をつく陽子の姿があったのはそれから、4時間半後のことである。

第2―4 夏休みの憂鬱 齋藤 桃花編（前書き）

前話と同じで見なくても、結構です。
時間がある時読んでくださると嬉しいです。

第2―4 夏休みの憂鬱 齋藤 桃花編

私はこの世界を愛している

喻え、私の世界が嘘と幻で出来ていたとしても…

第2―4 『夏休みの憂鬱 齋藤 桃花編』

気がつくと中心街の人混みのなかにいた。

「あれ？」

突然の事に驚いている少女は齋藤 桃花。

ここは、中心街の映画館前的大通りから少し逸れた道である。
大通りから逸れているからと言っても、人通りは多い。

しかし、桃花はこの道には入ったことはなかった。

だからこそ桃花は不安になった。

突然知らない道に来てしまった事に対してではない。

ちゃんと知っている場所まで戻れるかに対してである。

いつの間にか知らない場所に行くことは今までにも何回もある。
だから、今の状況にも慣れっこだ。

しかし、知らない場所に変わりはないので、知っている場所に行く

までが大変なのである。

ここまで来た記憶もないので、手探り状態になってしまう。

周りを見てみると、聞き覚えのある音楽がする。

ここが映画館の近くの場所だと理解し、ホッとする。
音のする方へ行ってみる。

見覚えのある大通りに出た。

知っている場所に出られたので安心したのか腕時計を見る。

時間は一時半頃…

今まで私は何してたんだろう？…

当然の疑問が頭に浮かぶ。

すると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

声のする方を見ると、神山 奈々と吉田 修平がいる。

二人は桃花と同じクラスで、一年前に転校してきた時に優しくしてもらった…

同じクラスで二人の親友であるからして、二人の間柄を知っている。

『修平をデートに誘う大作戦』を創った時も一緒に考えた一人でもある。

見ると、どうやら修平を誘う事はできたようだ。

でも、なんで夏休みの最後の日なんだろう… わざわざ今日することないのに…

明らかに奈々は怒っているようだった。
しかし、二人の事情を知っている桃花は下手に二人の前に出るわけにはいかない。

奈々の怒りを薄める事はできるだろうが、二人の時間を潰してしまうかもしれない。

頑張つてね！

二人にエールを送り家に帰ろうとする桃花。

桃花は寮ではなく、両親とこの近くのマンションでくらしている。
そういえば、二人にはまだ『アクシュ』をしてもらってないなあ
… 修平君は凄いつて噂だし、奈々ちゃんもそうゆうのに才能があり
そうな気がする…

そう思うと、急に不安になってくる。一人でいるのが寂しい…

誰かといたい…

すると、桃花は携帯の掲示板を開く。

この掲示板は一定の地区の人が集まるので、知り合いもよくいる場合が多い。

しかし、桃花にとって知り合いとかそんなのどうでも良かった。
掲示板に慣れた手つきで書き込む。

『アクシュして欲しいです。桃』

桃とはこの掲示板での名前のようなもの。

夏休み最後の日は、
なんだか寂しくなりそうだった…

第2―5 夏休みの憂鬱 伊藤 空編（前書き）

前話と同じで見なくても、結構です。

時間がある時に読んでくださるなら嬉しいです。

第2―5 夏休みの憂鬱 伊藤 空編

花のかほり

小鳥の囀り

通り過ぎる横顔

朝の光

嗚呼…私はこの世界の全てに嫉妬している…

『第2―5 夏休みの憂鬱 伊藤 空編』

彼の見ている夢を私も見ていた…

私が奪った幸せの時

彼は私を追ってくる…

泣きながら、私に還せと叫ぶ。

私にはどうしようもない。

彼は『空』の怒りを買い、彼は罪を認めている。

私には何もできない。

私は私にそう言い聞かせた。

心の中で彼に対する嫉妬と嘲りを感じたから…

私は違う。彼等のように何も奪いはしない。そう心に言い聞かせた…

私は時折彼をみている。

心の何処かで彼に対する罪を感じているからだ。

しかし、今の彼を見ると嫉妬が心を支配する。

私だって誰かと笑いたい。

誰かと泣きたい。

誰かと恋だってしたい。

彼に罪はない。

しかし、嫉妬せずにはいられない。

その楽しい時をまた奪ってやりたい。

なんて醜いことか…この私の心は

でも、彼から奪ってやった彼の大切な人がいなければ、私も隣にいる女の子のように、幸せな時を『彼』の隣で…

それはただの八つ当たり…

あの人のせいだけではない…彼が居なかったとしても…私はこうして貴方を見て、嫉妬していただろう。

だけど、赦せないくらい貴方が羨ましい

貴方にも、貴方の大切な人と同じ罪を背負わせたい…

怨むなら、怨むがいい…

そうすれば、私の心を少しは解るから…

第2―5 夏休みの憂鬱 伊藤 空編（後書き）

この話にでてくる伊藤 空は主人公である上村 喜一の兄である上村 空とは別物です。名前が同じなので、ごちゃごちゃしますが、二人の名前が同じ事には繋がりががあるので、ご了承ください

第2―6 夏休みの憂鬱 継がされる罪（前書き）

読まなくてもいいですが、時間があるとき、気になるとき読んでく
ださると嬉しいです

第2―6 夏休みの憂鬱 継がされる罪

罪とは何か

過去の過ちを償う者の称号か

罪とは何か

罰する者への目印か

『第2―6 夏休みの憂鬱 継がされる罪』

時刻は3時40分

奈々と修平は二時間ものの感動ラブストーリー『あの空の日に』を見た。

今映画館前には修平の姿だけである。

奈々は泣きすぎて、落ち着くまでトイレに籠っている。

修平は映画の内容は正直覚えてない。

たしか、昔人殺しをした罪を背負っていた青年は、罪を悔い孤独になろうといていたが、雨の日にも外を歩くと、一人の女性と出会う…ダメだとは思っていても、その女性に惹かれてしまう青年。交際してからだいぶたった時、青年は彼女に昔してしまった過ちを彼女に話す。「罪とは罰するためにあるんだよ…」罪に対してそういうった考えを持つ青年…

「確かに、罪には罰がくだります。でも、罪って償うためにもあると思うんです…」

女性は語る。罰せられる事を恐れて嘘をつき無罪になったが、最後

には神に眞実を見抜かれ罰がくだる。

その日がくる事を恐れていた青年にとって、彼女の考えは、眩しかったのだ。

だからこそ、彼女に惹かれたのだと悟る青年。

しかし、時の流れは憎悪を熟成させてしまった。

殺された男の妻がついに二人を見つる。

復讐に燃え、自分と同じように大切な者を奪ってやる。と誓う男の妻。

雨の日…外を出歩く青年の目の前で、彼女に切りかかる男の妻。女性を庇い、刺される青年。

男の妻は逃げ、女性は青年の名を叫ぶ。

「これでいい…」
そう言つて動かなくなる青年…

青年と女性には冷たい雨がただ降り注ぐ。

本当に暗い話である。

結局、何がいいのか解らない…

てゆつか、本当に憂鬱な気分である…

すると、修平は戻ってくる奈々の姿を発見する。

手を振り、合流。

奈々は機嫌が治ったようで、最初にあつた荒々しさはもうない。

一緒に洋服専門店で服を楽しそうに似合ってるか聞いてくる無邪気な奈々の笑顔を見るだけで幸せな気持ちでいっぱいになった。

大通りを歩きながら、奈々の横顔を見ると何だか奈々もニコニコしていた。

そんな横顔を見て、本当に可愛いと思う修平。

もし、奈々と結婚したら、娘二人がいいな…奈々と顔がそっくりで…そんな二人にパパなんて呼ばれたら…

くううう！

ヤバイ。

そして奈々と共に二人の娘の健やかな寝顔を見て、もう一度二人の愛を確認しあう…

「アハハハハハ！完璧だ…一部の隙もない！！」

と言いながら、薬局の前にあるキャラクターの人形に頬をすり付ける。

ただの変態である。

「な、何やってんじゃあ！ この変態やろ！」
思わず、修平のケツを蹴り上げる奈々。

なんだかんだでお似合いの二人であった…

そんな事をしていたら、あっという間に夜になってしまった。奈々の作戦では、歩道橋の中央で大通りの夜景と一緒に見ながら、告白する…

この街は市長が綺麗な夜景をバックにプロポーズし、OKをもらった事から、市長はこの街もそんな夜景の綺麗な街にする事に力を入れている。

ゆえに、この歩道橋から見る夜景はいつ見ても、本当に綺麗だったのだ。

しかし、今の奈々にその景色を楽しむ余裕はない。

修平がいろいろしゃべっているが、それを聞く余裕もない。

頭の中は告白する事ばかり考えている。

素直…素直…素直…

自分に言い聞かせる奈々。

買い物の時も告白する事ばかりで、時々その場面を想像してニヤニヤしてしまったのを、修平に見られた気がする。

実際見られているのだが、奈々にはそれを気にする余裕もない。気がつくと、修平は一点を見てずっと黙っている。

修平の目線の先を辿ると、一カ所消えかかっている街灯がある。この夜景に力を入れている街にとって、街灯が消えかかっている事自体異常であるが、修平が見てるのはそれではない…

街灯の下…チカチカと断続的に明かりに照らされる一人の女性…いかにも怨めしそうにこちらを見ている。

不気味だった…今日みた映画に出てくる男の妻も相当不気味だったが、この女性はそんなものを忘れさせるくらい不気味だった。

すると、修平はその女性の所に走っていつてしまった。

「修平…？」

あまりの出来事に奈々は動けなかった…

時は奈々が歩道橋の中央で告白する覚悟を決めている頃に遡る。

さつきから、奈々の反応が少ない。

飽きたのだろうか…
そろそろ帰ろうかな…

と修平が思っていた時、修平の視界の端に妙なものが移った。

消えかかっている街灯。その下で断続的にライトを浴びて見え隠れする一人の女性…

不気味だったが、修平の頭の中に朝見た夢がフラッシュバックの如くよぎる。

あの女は俺の大切な人を連れていった女…

俺の幸せな時を奪っていった女…

今女は俺達を怨めしそうに見ている

これ以上…これ以上俺の大切なものを奪っていくってんなら、容赦はしない。

女の所に駆け寄る。

「てめえ…何のつもりだ!!」

アイツだけは…アイツだけは連れていかせてたまるか!! アイツは…」

言葉は途中で圧倒的な光に包まれて、遮られてしまった。

修平は光に包まれて消えてしまった…

それから一時間奈々は修平を探していた。

何故あの女のところに修平が走っていったのか解らない。

何故女と共に消えてしまったのか解らない。

「修平…っ！」

なんでもいいから、修平の聞き慣れた声が聞きたかった。

どうしても、見つからなかったので寮に帰り、寮監の村田さんに事情を説明すると、それを聞いていた他の友達が慰めたり、修平の非難をしたりした。

どうやら、修平が自分をほっというて違う女の所に行ったのだと、勘違いしているようだった。

村田さんは少し考えて

「もしかしたら、修平君は戻ってこないかもしれない… 戻ってきたら知らせようか？」

はいっ！と答えようとしたが、周りの友達に止められ、あんな男の心配する必要はない。最低よ！ 修平のやつつなどと非難の声が拡がる。

いろいろ反論したが、結局信じてもらえず疲れているだろうから、今日は休みな… 修平には私たちが明日しっかり制裁をして、奈々には近づかせない… などと心配してはくれているが、奈々の話を信じる者はいなかった。

こうゆう時、修平は私を信じてくれていた事を思いだし、涙が込み上げてくる。

その涙の理由をまったく知らない友達は更に誤解を深め、真実から遠退いていく…

村田さんだけは、深く考え込んでいた。

修平が戻って来たのは、早朝の4時頃。

村田さんが訳を聞いたが、修平は何も言わなかった。

それがますます奈々の友達に疑惑の念を膨らませる。

奈々は修平から話を聞きたかったが、友達に止められた。

村田さんは今回の件については不問にする事にした。

修平から『ゴメン…』とメールが来たのは、朝の6時頃だった。

夏休み最後の日はなんとも憂鬱な気分が終わった…

第2―6 夏休みの憂鬱 継がされる罪（後書き）

めんどい事したと、後悔してます。

まだ本編にすら出てないキャラをここまで掘り下げるなんて…

やっと夏休みの憂鬱編が終わりました。

無駄な話が多かった気がします。

これからも、がんばるんでよろしくお願いします。

第3―1 アクシュ

我々は他人と触れ合う

我々は他人と笑う

我々は他人と哀しむ

触れ、感じる事で

心は産まれる。

『第3―1 アクシュ』

夏休みが明け、今日から新しい学校生活の始まり。

ところが、喜一はすごい疲れていた。

昨日はすごい事になったような…

喜一は昨日の事でいろいろ考えたが、結局解らないまま今日になっ
てしまった。

兄貴に相談するってのもなんか違うな…

痛いヤツなんて思われるのも嫌だしな…

喜一の兄である空は一足早く家を出た。

喜一もそろそろ出る予定だ。

新しい学校の名前は上山桜丘高等学校。

なんでも春になると桜の景色が素晴らしいちょっとした丘の上にある学校らしい。

春かあ…遠いなあ…

桜が咲く頃は三年生。大学受験だつてある。
憂鬱だ。

「おつ、ヤバいなそろそろ出ないと。」

家に鍵をしめ、いざいかん。

昨日闘った場所の近くを通る。あれは夢なんかじゃない事はわかっている。

逆にそれしかわかっていない。

まあ、考えて解んないんだからしょうがないし。

なんて気楽に考えようとする。

それより重要なのは新しい学校で楽しく暮らせるとゆう事である。

先ずは第一印象…やってやる…

「クスクス」

笑い声で目を覚ます喜一。周りには何人かの女子と男子がいる。すると、一人の女子が話かけてくる。

「喜一君ずっと寝てたけど、学校終わったよ。先生が後で職員室に来てさ。それにしても、顔に寝てた跡がついてるよ。」

「あつ！へっ？」

急いで今の状況を理解しようとする。

たしか、朝気合いを入れ、学校の職員室に入り始業式が終わるまで教室で待機と先生に言われ、その教室でそのまま寝てしまったのだ。

「わっ！あ、あの！」

当然慌てる。

ん？この娘、俺の名前をしってる？

「何で俺の名前知ってんの？」

「あー…喜一君がどうしても起きないから先生が先に自己紹介しちゃたの…てゆうか、どんだけ寝てたの？」

ビックリしたよ。教室に戻ったら知らない男子が寝てるんだもん。」

「えっ？アハハハハ…えと…とりあえず起こしてくれてあり

がとう。えーと…」

「あっ！神山 奈々ね。よろしく」

「よろしく。神山さ…」

と喜一の言葉が大きな怒声で途切れる。

「奈々！！」

教室のドアを思い切り開け、飛び込んでくる一人の男子。

「修平！！？」

修平と呼ばれた男子は奈々の近づくと、土下座する。

「すまーん！！！」

奈々は少し困った顔をしてる。

何かあったのかこの二人？

何も知らない喜一は状況を理解出来ない。

土下座をしている男子に近く奈々。すると男子が急に頭をあげる。
近づきすぎた奈々のスカートが男子の頭でめくり上がる…

「これは、これは…今日も可愛らしい下着デスね…ごめんなさい
…」

「何しとんじゃわりやややややや！……！！！」

修平と呼ばれた男子は頭を思い切り蹴られ、マンガのように教室を舞う。くるくると舞う…

転校初日から軽いトラウマものの目の前で見せつけられる。

床に叩きつけられ、気絶する修平。それに追い討ちをかけるかの如く修平をガンガン踏みつける奈々。

喜一の中でこの娘だけには逆らわない事を静かに誓う。

すると、教室に何人かの女子が入ってきた。

そして、教室の光景を見る。

女子達は奈々に近づき

「さすがは、奈々…」

自分でケリをつけるとは！」

下に気絶し転がる修平の事など気にもせず奈々を称賛する女子達…

「えっ？あの…これは…」

奈々は対応に困ってるようだ

「気にする事ないよ修平なんか。皆！今日は奈々が修平にケリをつけた記念として、どうか食べにいき！」

と言って奈々を連れて教室を後にする女子達。途中で修平に

「もう奈々に近づかないでね！」

と毒づいたりする。

明らかに修平が奈々になんか酷い事をした事を予測させる状況である。

しばらく動けずにいると、気絶していた修平が起きる

修平はなんか深く考えるポーズをとったかと思うと、突然

「シマシマパンツなんて二次元にしか存在していないかと思って
いたが…うむ…ありだな…」

となんだかバカな話をしている。どうやら無事のようなのだ。

「どう思う転校生、上村 喜一。」

突然修平に話を振られる喜一。

「えっ？なにが？」

狼狽える喜一。

「何がではない。シマパンの存在についてだ。」

当然だと言わんばかりの顔でこちらを見る修平。

「いや、えと…」

教室にはまだ何人かの生徒が残っている。

あの騒動で一切狼狽えないクラスメートを見て正直びびる喜一だが、一応これから仲良くなる仲なので、下手に答えられない。

答次第で早速株が下がるかもしれないからだ。

「むっ？お前もしかして…」

ぐっと思いに近づく修平。

狼狽える喜一。

「奈々に惚れたのか？」

「へっ？」

驚く喜一

「そうだろう。そうだろう。奈々は可愛いからな…」

「いや、待て待て。なんでそうなるんだよ！ 可笑しいだろ！」

「ハハハハ！そうかだが奈々は俺が先約済みだ…俺と奈々の恋に邪魔は許さないぞ…転校生、上村 喜一！」

「いや、話聞けよ！てゆうか、アンタも散々な結果だったじゃねーか！」

「あの…」

「フハハハハ！まだ道はあるさ…この俺の愛がある限り！」

「あの…」

「それってストーカーと対して変わらねーよ！もっと現実受け止めて生きろよ！」

「アハハハハハ！俺はちよっぴり愛の表現の仕方が変で、陰湿で諦めが悪いだけだ」

「あの…ちよつと…」

「それをストーカーって世間は呼ぶんだよ！てゆうかお前さっきの状況から考えるに確実にストーカーじゃねーか！」

「話を…聞いて…」

「ストーカーではない！　そこに愛があるのだから」

「ちょっと…」

「誰かー…コイツに通訳できる人くれ…てゆうか話聞けよ！」

「あの！」

二人のコントは一人の女子によって止められる。

「おう？」

喜一は転校初日なので、まったくこの娘を知らない。

「何だ…桃花じゃないか…何か用か？　今シマパンの有無の是非について転校生、上村　喜一と熱く語っている所だ…」

「するか！　全然話の内容ちげーし！　女子の前でシマパンとか堂々と語るな！」

「シマパンですか…？　確かに今時シマパンなんて…なんて思われがちですが、私としては可愛いと思いますし、時々私も穿きますよ。」

「何！？　そうだったのか…なら今桃花はシマパンを穿いて…」

「聞くなー！　女子にそんな事聞くなよ！　てゆうか、桃花さんだっただけ？　アンタも何当然の如くパンツ談義しとるんですか！」

「へっ？ あっ！そうでした。修平君に話があるんですけど…」

「告白なら断る！」

「どんだけ、ポジティブな思考してんだよ…」

喜一はなんだか疲れてきた…

「違って、奈々ちゃんの話です。修平君、何かしたんですか？奈々ちゃんはともかく、他の娘たちがすごい怒ってるようですけど…」

「むっ？ 特に何もしていない。強いて言えば、奈々の顔を見て、幸せな未来を想像してただけだが…」

「さっきパンツ見たじゃねーか」

と喜一が訂正する。

「そうですか…ちょっと奈々ちゃん探してきますね。なんか変な誤解があるみたいだし…」

と言って教室を後にする桃花。

「えっ？パンツを見た事はスルーなんだ…」

喜一は驚く。

「そう言えば、先生がお前の事を探していたぞ。転校生、上村

喜一。職員室に急げ」

その言葉を聞いて職員室に行かなければならない事を思い出す喜一。

慌てて教室を出る。

「職員室の場所解るのかー？」

後ろから修平の声が聞こえる。

「ああ！サンキュー」

心配してくれた事に礼を言う。

変なヤツ…

そう思いながら職員室へ走る喜一。

でも…嫌なヤツじゃなさそうだな…

職員室でいろいろ話を聞き、職員室を後にしる喜一。

下駄箱で近くのベンチにふと目をやると、先程の修平とかゆう男子が座っている。

太陽に照らされ、深く考え込む姿は男の喜一にもかっこよく見え

た。

しかし…と喜一と考える。

コイツは変態だし、さっきの桃花とかいう娘はいかにも綺麗で清楚なイメージなのに、パンツの話するし、

奈々とはいう娘も可愛いイメージなのに、あんなに凶暴だし…人は見かけじゃないか…案外合ってるかもしれない…

そんな事を考えていると修平がこちらに気付いたようでこちらに近づいてくる。

「よっ！転校生。」

「もう、喜一でいいよ。俺も修平って呼んでいいか？」

「断る理由がないな…」

「あっ！私は桃花でいいですよ。喜一君。」

後ろから声がある。

驚いて後ろを見ると桃花が立っていた。

「いつの間に…」

「ん？今来たんですよ。」

きょとんとして答える桃花。

「とゆうか、まだ残っていたのか…桃花。」

「うん。探してたら遅くなちゃって…あの修平君…」

「ん？」

「『アクシュ』してくれませんか？」

『アクシュ』？って握手？へっ？どゆこと？

二人を交互に見ながら、キョトンする喜一。

この街に来てから不思議な事ばかりだった…

第3―2 蠢く闇

俺はただ叫ぶ

届かないと知っても

叫び続ける

叫ぶことでしか伝える術を

俺は知らない

『第3―2 蠢く闇』

上山警察署前。

「だから、詳しい説明をください！このままじゃ納得する事なんてできない！」

怒鳴っているのは刑事の岩田。もうすぐ五十歳になり、部下の指導まで任されるベテランである。

「ですから、今世間に知られれば大騒ぎになるのは必至です。マスコミの非難も避けられません。」

と冷静に答えるのは喜一の兄である上村 空。

「そんな事を聞いてるんじゃないんです。このままじゃ、やれてった部下の家族に会わせる顔がない！せめて我々や家族の方達ぐらいになら説明してもいいんじゃないすか！『右席殿』…アンタこの事件、無かったことにしようとしてるんじゃない…」

『右席』それは空がこの警察署でのポジションである。政府から派遣され、大きな権力を持っている。

「……」

空は答えない。

「アンタ本当は全部知ってるんだろ… 昨日もあの後上山桜丘の三年の女子高生を保護したみたいだし… その女子高生だってやられた部下と同じ症状。アンタ… まさか…」

「それを語る事に意味はありません。我々はこのような事件を未然に防ぎ、市民を守る事に全力を注ぐ。それだけです。」

と言い、車の方に向かう。

「またですか…」

と言つて表れたのは岩田と組む刑事… 後藤である。

「お前どう思う？」

岩田はタバコに火を着けながら後藤に聞く。

「怪しいですね。なんだかねで岩田さんの質問を否定しない所も。」

「お前、あの人の動き明日から探れ。」

「マジですか？ ヤバいですよ。」

「責任は俺が全部負う。このままじゃ終われねえ。ここんところ増えてる犠牲者やアイツらのためにも」

その近くに停めてある車の中からさっきのやり取りを観てる者がいた。

「さっきの車に向かったヤツだ。あの男が上村 空だ。」

車の後部座席に座り、仲間に説明するのが一護。

「なるほど。あれが上村 空か…」
空をジッと見てるのが優夢。

「どうするの？優夢。」
質問するのは運転席にいる、まみ。

「今日の夜接触する。味方になれば良し、無理なら力づくだ。」
「だけど、アイツ強いぜ。一人じゃキツイぞ。」
一護は優夢に忠告する。

「それは、一護は弱いからじゃないの？」
口をはさんだのは、後部座席に座るもう一人、惣太郎。

「ああ!？」
「やめろ。惣太郎も挑発はやめるように、伊藤さんに言われてい
るだろ。」

「優夢も伊藤さんに浸透しすぎじゃない？もっと我をもちなよ。」

「お前は協調性を持て。まみ、花村に連絡してヤツの携帯番号を
調べさせてくれ。」

「わかったわ。」

「一護は今日俺と来い。」
「了解つと。」

「？」

まみの顔が濁る。

「どうした？まみ。」
隣の優夢が尋ねる。

「ドールから臨時報告が入ってるわ。でも…これは…」

「どうした？」

「デュアル・シンボルを持つ子のデータだわ。だけど…」

「何！それは本当か？」

優夢が異様な反応をする。

「だけど…何のデータも無し。名前と写真だけ。」

「名前は何て呼ぶんだい？」
惣太郎も興味を示す。

「上村 喜一。」

「！」

驚く一護。

「兄弟かな？」

惣太郎は面白い物を見つけたように顔がニヤついている。

「なるほど…ならば、デュアル・シンボルとゆうのも何となく理解できる。血縁か。」

優夢は何か考えているようだ。

「どうする？」

再びまみが質問する。

「花村に連絡しろ。上村 空の件と、上村 喜一の場所を特定を頼むようにな。」

「喜一ってヤツ、僕がもらってもいい？」惣太郎はまだニヤついている。

「いいが、念のためまみを連れてけ。接触は今日の夜。二人とも生きたまま捕獲だ。生きていれば状態は問わん。」

我等は女神のために。

闇が今…動きだす。

第3―3 愛

君が泣く

僕の心に雨が降る

君が悩む

僕の心は曇る

君が笑う

僕の心は雲一つない晴天となる

僕は誓う

もう二度と雨は降らせないと

『第3―3 愛』

上村 空は車を走らせていた。

行き先は病院。

昨日護りきれなかった少女の見舞いに行くのだ。

彼女の名は青井 香

上山桜丘高等学校の三年生…これからとゆう時を護りきれなかった空の心は曇っていた。

すると携帯に連絡が入る。

車を道路の脇に寄せ、電話にでる。

「もしもし、なんだ… 湯川か… お前や村田の言う通り、岩田さんは可能性があるな。それもとても大きな…

後で岩田さんに事情を説明するつもりだ。

ああ… わかつてる。あくまでも、内密にだ… じゃ、切るぞ。」

ピツと電話を切る空。

車を発車させようとすると、また携帯になる。

知らない番号だった。

とりあえず電話にでる。

「もしもし。」

「我々は『アンチ・スカイ』。それだけ言えばわかるな？」

「！ 何の用だ？ 今度は誰の指令を受けている？」

「今日の午後２２時に上山公立公園で、待っている。」

「待て！」

しかし、電話は突然切れる。

行かないわけには行かなかった…

所変わり中心街の大通りに近い道にある雰囲気のあるパスタ専門店。

喜一はそこで吉田 修平と斎藤 桃花と共にテーブルに着いていた。

あれから一時間が過ぎた。あれからと言うのは、学校の下駄箱の近くのベンチで桃花が修平に『アクシュ』を求めた時からである。

修平は桃花の話をいつもの調子と言わんばかりに桃花の話をスル
！。

それから喜一の転校歓迎会をやるつとゆう訳で、この店にいる状況。
普通こつゆうのはもつと盛り上がる場所でやるのではないかと喜一
は考える。

ま、こつゆうのも良いし、やってくれるだけありがたい。

「しかし…お前がこんな店に誘うとは思わなかったぞ。何か似合わ
ん。」

「最近パスタにハマっていてな…この店の一番人気のカルボナーラ
を食べ、俺の中のバリエーションを増やそうとしてな…そして必ず
や奈々の心を俺のものにしてみせる…」

「てゆうか、お前、料理とかできるのか？全然イメージわからない
んだけど」

喜一と修平はこの短時間の内に完全に友人とゆう間柄にまでなっ
ていた。

「修平君は本当に料理上手なんですよ。とゆうか、もう何でもできるレベルですから。」

と桃花もちゃんと話には入ってきてるが、まだぎこちない感じた。

「なんでもって？」

「勉強、運動、料理、家事、周りの世話…なんでもです」

「お前って本当はスゴいヤツなの？」

喜一は宇宙人を見るかのように修平を見る。

「何を不思議がっている。俺は奈々を幸せにする男だぞ。奈々と奈々にそっくりな二人の娘達…彼女達にカルボナーラを作る俺…三人の幸せそうな笑顔…完璧だ…一部の隙もない。フハハハハ！そう…その中に一切の不安要素の存在も赦さない…彼女達の顔を歪めるすべて存在を俺は抹殺しなければならない。

この程度のスキルではむしろ、不安だらけだ…俺は彼女達のために完璧な男になる。」

高笑いをする修平。

恥ずかしいのでそれを止める喜一と桃花。

「なんか、お前ゴメンナ…ここまで一途だと逆に凄いよ…」

「奈々がもし虫が嫌いだと言うのなら、俺は世界中の虫を消し去る。フハハハハ…」

「桃花は何喰うか決めた？俺は修平が言ってたカルボナーラを頼もうかな…」

「私はこの地中海のシーフードスープパッゲッティを」
二人とも完璧に修平を無視する事にした。

注文を終えると。桃花はお手洗いに向かって行った。

「すまん。喜一…後でちゃんとした歓迎会をするから。」

修平が小声で話かけてきた。

「あの時はちょうど良い話が無くて、どうしようもなかったんだ。」

「

「あのアクシユの時だろ？別に握手ぐありいいだろ？てゆうか、話の転換に飯誘うか？普通。」

喜一もさすがにあの時の修平はなんかおかしかったので、引つ掛かっていたのだ。

「ただの握手ならな。」

「？」

「お前は転校してコツチに来たばかりだから知らないだろうけどな…『アクシユ』ってのはただの握手じゃない」

「なんだよ？」

二人の間の雰囲気が一変する。

「良く言えば精神安定剤みたいなモノ。悪く言えばドラッグみたいなモノ。」

「桃花がそんな事するようなヤツじゃなさそうだぞ？それにお前も。」

「

「薬って訳じゃない。ただの儀式みたいなモンでな、その効果と薬じゃないってのが話題で若者の中で密かに広まってる。」

「儀式？ そんなオカルトな…」

「昔ドールってヤツが広めたらしいけどな、現実には広まってるしこの街じゃ少し問題になってる。」

「ドールってのも胡散臭いじゃねーか。そんな儀式スゲーヤバいんじゃないか？」

「儀式自体は簡単にできる。光で出来た影同士で手を繋ぐような形をとって、相手と繋がる想像をするだけ。すると、互いに繋がった感覚がして、心が安定するんだと。」

「繋がるってなんかエロいな…」

「実際そいゆう手で女を餌食にする輩もいるしな。」

「マジかよ！ てか、なんじゃそら！」

「更にその儀式には依存性がある。二人で繋がる感覚を得る事で安息を得るとゆう事は、逆に離れた時に孤独感を感じる。最初は小さなものだが、やり過ぎると孤独感は大きくなり、一種の中毒状態になる。」

「オイオイ！ マジでヤバイモンじゃねーか！」

「奈々は桃花を気にしてた。どんなに言ってもやめないんだって

…そんなのに俺がやる訳にはいかねえだろ？　俺がどうにかするべきなんだが、どうしようもなくてな。」

「……」

喜一は黙る。

あんな綺麗で清楚な少女が…

「さらに危険なのは、さっき言った犯罪者みたいなヤツがいてな。『アクシュ』するかわりにってするヤツらがいるんだ。今の所大丈夫みたいなんだが、そろそろ止めさせないと。とんでもない事になりそうだな。」

桃花が戻ってくると喜一と修平はいつも通りに接した。

修平曰く、しばらく桃花を説得して自然にやめるのを待つて、それでもダメなら力づくで更正させるように奈々と計画を立てていたらしい。

店で時を過ごし、店をでる頃にはの１９時になっていた。

修平は病院に用があると言って、途中で帰った。

こんな時間に病院だなんて、と思ったがそれは言わなかった。

その後桃花と大通りを歩き街を案内してもらった。その都度『アクシュ』を求めてきたが、適当にあしらい、止めるように忠告していた。

家まで送ろうかと聞いたら、もう遅いし早く帰ったほうがいいと言われ、気が着くと夜の22時になっていた。驚き、言葉に甘え家に帰る事にした。

その帰り道。

ふと、後ろから人の気配がする。この辺りは街の周辺街で、中心街に近いと言っても、この時間に人影は喜一ぐらいははずだが…

「こんばんは。上村 喜一君。少し良いかな？」

後ろから声をかけられる。本当にいたようだ。

恐る恐る振り向くと、昨日襲ってきた女と一人の男性がいる。

男性と呼ぶよりは喜一に歳の近い青年と言った方が近いかもしれない。

昨日の女がいる時点でもう既に、危険な匂いがする。

背中に嫌な汗が流れるのがわかる。

「キミちよつと力貸してくんない？」

明らかにそれだけでは済まない感がビンビンに出てる。長い夜になりそうだった。

所変わり、上山公立公園。

ここは昼間は憩いの場だが、今は人一人すらない。

その中で3つの影

一つは上村 空。他2つは優夢と一護だ。

こちらもただでは終わらない。そんなピリピリした緊張に包まれている。

「さあ、始めようか…」

優夢は月光の下この緊張した空気を更に研ぎ澄ます一言を放つ。

その光景を一人の少女が観ていた。誰にも気付かれず、ただじっとその光景を観てるだけ。

その少女は消えかけた街灯の下でただじっと…始まるのを待っていた。

第3―4 殺す者

この世界のあらゆるモノは犠牲の上に成り立っている。

我々がただ生きるだけでも我々は幾つもの犠牲を払っているのだ。

見ろ

足下に広がる血と肉と骨でできた世界を

気付くべきだ

我々はその世界の中で幸せを見つけようとしていることに。

気を付ける

踏み外せば

次はお前がその世界の礎となる

『第3―4 殺す者』

風が吹く。空気が痛い。

上山公立公園の中に立ち込める空気は今はりつめたモノとなり、常人が何もしらず入れば一瞬で意識を持ってかれるような緊張感が支配する。

「我々と来い。上村 空……」

優夢はいつもと変わらない命令口調だ。

「悪いが…そちらにつく事はもうない。あの実験の当事者である俺がお前らの計画を必ずや止める。それが俺の義務だ」

空の意志は固い

「ただ利用されただけなのに、当事者たあ随分と真面目だねえ」
一護は黄色く輝く剣をどこからともなく生み出し、不敵に笑っている。

「お前の力は我等が女神のためにあるものだ。ならば我々と来い。役目を果たせ。」

優夢も青く輝く剣を生み出し、切っ先を空に向ける。

これは優夢の最後の命令だと言わんばかりの殺気を放つ。

「そんな事してもお前らは救われない。たとえお前らの宿願が叶うとも。」

空も顔の前に手をあて、下に引く。

空の顔には蒼く輝く仮面が生まれる。

「交渉決裂か…ならば力づくで行かせてもらおう！」

優夢が剣を構える。

刹那…空は優夢達の目の前に現れる。

瞬間移動ではない。余りにも速い速度と、突然の攻撃に優夢達は反応が遅れる。

力の衝突が起こる。

攻撃するは空。

受け止めるは一護。

優夢は一瞬遅れて剣を振る。

すると力は消え、空は後ろに下がる。

「な…！」

声を発したのは空。

その声には明らかに驚きと焦りに縁取られている。攻撃が止められた事にはない。一撃で倒せるとは思ってもいないし、殺す気もなかった。

驚くのは優夢が持つ青く輝く剣がもつ象徴である。

「さすがにこの剣が指し示す象徴に気づいたか。」

優夢はその剣を軽く振る。

その剣がもつ象徴は『敵を殺す』。その剣に触れば、命ある者は全て息絶える死の剣である。

「まさか、それを扱える者がいるとは…一体何をされた？」

空はその剣の存在に対する嫌悪感と今闘っている優夢に同情心を抱く。

「同情か？優しいヤツだな。」

優夢の顔は一切の変化がない。

恐らく…あの剣の悪影響を最低限にするために感情の殆どを消されたのだろう…

と優夢の顔を観ながら予測する。

そして気づく。

もう一人の男がいない事に…

確かあの男のシンボルは…

周りを警戒し始める直前、空の後ろの空間が『切り裂か』れる。切り裂かれた空間の穴から現れる一護。

間一髪かわす事に成功する空。

しかし、バランスを崩した所へ優夢の死の剣が迫る。

空は力を一瞬のため、それを優夢にぶつける。

その力は少し剣を止めると、死の剣に『殺さ』れる。

さすがに二人相手にするにはキツイ相手だ。
黄色く輝く剣が指し示す象徴は『切る』。

先ほども空間を切り裂き、空の後ろに現れたのだ。

万物を切り裂く剣。

どちらも一筋縄ではいかない相手だ。

空は覚悟を決め、ポケットに入っている薬を取り出し、一つ飲む。
その意味が敵である優夢達にも伝わる。

これからが本当の戦いが始まる。

二人も直ぐ様に薬を取り出し、呑み込む。

「その薬どこで手にいれた…」
やはり優夢は命令口調である。

「答える必要はない」
空の周りに蒼く輝く力が渦巻く。

優夢と一護も己の力を高める。

公園にはりつめた空気が一変する。

「マスカレード…」
空はそう囁き、両手を広げる。

すると、いくつもの蒼く輝く仮面が現れ、踊るかの様にそれぞれが動き始める…

「百式！」

「一閃！」

一護と優夢も力を解放する。

踊る仮面の中心で空は更なる力を解放する

マルクト
「王国……」

仮面の動きが止まり、明らかに攻撃体勢に入っている。

その瞬間、三人の力が激しくぶつかる。

「何でそんな警戒するかなあ……ただ力を貸して欲しいって言った
だけなんだけど」

所変わり周辺街の小道。警戒する喜一をよそに惣太郎は軽くしゃべりかけてくる。

「誰でも初対面でアンタに警戒心を抱かないヤツはいないと思うよ。」

惣太郎の後ろにいる、まみが静かに前に出る。手には蒼く白く輝く弓。

「知らない人には付いていくなって言われているんでね。失礼したいんだけど。」

喜一の顔にはいくつもの汗が流れている。

「あら、ダメよ。アナタはこちらにとって大事な人柱になるかもしれないんだから。」

人柱と聞いて想像するのは生け贄ぐらい…相手から感じる殺気から冗談には聞こえない。

…くそっ！また会ったらいろいろ聞こうと思ってたけど、もう帰りたい。今すぐ帰りたいですけど…

喜一の頭の中では逃げる算段を立てている。

昨日やこの前のように巨人が助けしてくれるかも解らない喜一にとっては、最良の選択とも言えるモノだが、今回違うのは敵が二人いることと、敵がある程度自分に知っていると云う事である。

ただの人間がただで逃げるのは不可能に近かった。

現に今まみは弓の標準を喜一に向けている。何しようとするに攻撃できるようにしている。

「さあ！そのデュアル・シンボルってのを早く出してくれよ！」

惣太郎が喜一にけしかける。

「？」

喜一には相手の言っている意味が解らない。

「出さないの？なら…始めちゃうけどいいかい？」

惣太郎の手には黄金に輝く槍のようなモノが出現している。

「だから、何！それ！！」

喜一は叫ぶが相手は待つてくれない。

槍が喜一を襲う。

槍は弾かれる…

惣太郎の目には狂気の光に満ちる。

喜一を護るかの如く紫に輝く巨人が現れ、その手に持つ十字架によつて槍を弾いたのだ。

惣太郎は何歩か後ろに下がり、巨人をじつと見る。

弾かれた…僕の槍が…

惣太郎は槍が弾かれた事に対し異常なまでに驚いていた。

それもその筈で、惣太郎の槍の指し示す象徴は『突き刺す』。

突き破れないものなどない最強の槍。

それが弾かれたのだ。それも真正面から…

それを見たまみは弓を引き、何発もの矢を放つ。

巨人は十字架でそれを防ぐが何発か十字架をすり抜け、巨人に当たる。

それと同時に喜一の体に突き刺さるような痛みが走る。

「がああああああ！」

思わず叫ぶ喜一。

余りの痛みに涙がでる。アニメなどでは剣に刺されても平気な顔をしているヤツがいるが、喜一は闘うのは初めてであり、そしてこのような痛みもまた初めてだった。

「どうやらその十字架だけみたいね。」

「なるほど。デュアル・シンボルって言っても、バラバラな訳なんだ…面白いなキミ。」

惣太郎は笑っている。

「その十字架…キミのじゃないな…どうやって奪ったんだい？」

それとも奪う事がキミのチカラなのかな…」

喜一には惣太郎の言っている事がまるで解らない。

…このチカラが誰かから奪った？…

痛みのせいで頭がボォーっとする。

「殺さないでね、惣太郎。あくまで、生け捕りよ」
まみもそう言いながら弓をまた構える。

…ヤベエ…今度は無理かもしれない…

喜一の頭に諦めがよぎる。

突然辺りが強い光に包まれる。
その光の発生源は喜一の後ろ10メートル。その中から二人の影が現れる。

二人とも喜一が知っている顔だった。

「お前だったのか…」

現れた二人の内の一人が呻く。

その声の主は喜一がよく知る者であり、そして喜一が知っているかつこよく、何事にも動じないような顔はどこにもなく…ただ、ただ怒りと憎しみに満ち、その声は喜一がその人からは想像もできないほど大きく、大きく。その声と顔から相当の怒りが想像できる。

「お前が拓郎をやったのか…赦さん。お前だけは絶対赦さねえええええ…!!!」

その言葉と共にそれを中心にチカラによる余波が喜一とまみ、そして惣太郎を怯えさせていた。

そして輝きすぎるほどの光を携えて、一対の翼が生まれる。

天使の翼の如く美しく、神の如く神聖で、罪人の如く重いものを背負う者は修平。

その後ろで驚きと恐怖の色を隠せず震えているのは、今日ちよつとだけ知り合った神山 奈々の姿だった。

第3―5 ツミノツバサ

その罪

翼となりて

今

飛び立つ

『第3―5 ツミノツバサ』

時は喜一と桃花が修平と別れた所まで遡る。

時間は19時頃、修平は病院に向かっていた。

病院に行く理由は見舞い。この時間では本来面会ができないはずだが、入院している患者が特別なので家族のみこの時間の面会を許可してもらっているわけだ。

しかし、修平はその患者の家族ではない。

部活の後輩程度の関係だ。

修平は病院と家族に頼み込んで面会の許可をやっと得ることに成功している。

入院している患者の名は若林 拓郎。

修平が所属しているバスケット部の後輩で、明るく、良い性格でいつも部活を明るくしてくれる。いわば、ムードメーカーという訳だ。

拓郎が入院したのは2週間前。原因不明の精神崩壊。

今、明るく、笑顔の眩しい拓郎はどこにもいない。廃人状態という表現が一番それに合っている表現だろう。

病院に着くと受付で許可をとり病室に向かう。最近こういった症状の人がこの街に続出していると聞いたことがある。

… いったいこの街で何が起きている？…

修平深く考え込みながらエレベーターに乗る。

拓郎の部屋は三階の一番端にある。

三階に着き、ゆっくりと部屋まで歩きだす。

部屋の前に着き、ノックをする。返事はもちろんない。扉を開け「よっ！元気か？」

修平はなるべく明るい笑顔を浮かべ部屋に入る。

返事はもちろんない。

拓郎はベッドで目を開けたまま、ピクリとも動かない。

光のない瞳はどことなく夜空を観てるようだった。

修平はカーテンを閉め拓郎に話しかける。

「昨日奈々とデートっぽい買い物したんだがな… 見事に失敗してしまったよ。お前にあれだけ好きな人の事を一番に考えるなんて言っておきながら、あの時… 俺はやってしまった。バカだろ。」

修平はあくまで笑顔は消さない。

「だが、心配するな。俺はまだ諦めんぞ。奈々は怒っているようだがちゃんと謝り、気持ちをぶつけてみる。それでダメなら諦めるしかないな。アイツが嫌がる事はしたくないしな。」

拓郎はずっと天井を見上げている。

「部活のほうは大丈夫だ。うまくやっている。先輩達は笑って引

退していったよ。部長を任されたからには、必ずすばらしい部活にしてみせる。だから…だからお前は何も気にする事はない。速く部活に戻ってこい！その時までには奈々ともケリをつけやる。だから…」

修平の言葉が詰まる。どうして！どうしてこんなに良いヤツがこんなになきゃならない！コイツが何かしたのか！理不尽にもほどがある！

修平の中に激しい怒りが嵐の如く吹き荒れる。

見舞いに相応しい気持ちではなくなってしまった。

「またな。」

修平は拓郎にそう言い部屋を後にした。

病院の受付のフロアの自動販売機でコーラを買い、椅子に座りながら気持ちを落ち着けていると、見覚えのある顔が病院の中から現れた。

「修平！？なんでアンタここに？」

それは奈々だった。

「奈々？どうして？俺は見舞いだが、もしかして何処が悪いのか？」

「違うわよ。それよりここ出ない？流石にこれ以上病院いると迷惑だろうし。」

「む？」

見ると、時計の針は22時を過ぎている。

二人は病院を出て、学生寮に向かい歩く。

「で、誰の見舞いだったの？」

修平が何を話していいかわからないで黙っていると、奈々が先程の続きを話してきた。

「拓郎…俺の後輩の若林 拓郎のな。」

「拓郎君が？そうなんだ…何で入院してるの？」

奈々は女子バスケット部に入っているので、男子バスケット部のメンツはだいたいわかる。明るく、性格の良いイメージだったと奈々は記憶している。

「良く解らん。廃人状態で入院している。」

「そっか。心配だね。」

奈々は暗い顔をしている。

「お前は何故？」

「私もお見舞い。香先輩の…」

香先輩。本名は青井 香。

バスケット部に所属しており、奈々達のお姉さんのようなキャラで奈々達も姉のように慕っていた先輩だ。

「まさか、先輩も？」

修平は最近続出している原因不明の廃人症状ではないかと心配になった。

「わからない…先輩まだ目を覚まさないの…。先輩を保護してくれた警察の人には大丈夫って言われてるけど…私心配で…先輩も目が覚めたら、ああなったらどうしたら…」

奈々は今にも泣きそうである。

「きっと大丈夫だ。信じてたら、きっと戻ってくる…きっとだ…」

「うん…うん…」

奈々は下を向いてただ頷いていた。

修平は奈々にそう言い、自分にも言い聞かせた。

途中の自動販売機でコーヒーを買い、奈々に渡す。

奈々は少し落ち着いてきたようだ。

「大丈夫か？」

「うん。」

声にも奈々らしさが少し戻ってきている。

「修平は…」

「む？」

「修平はああならないでね。絶対、絶対だよ！」

奈々はまた泣きそうになっている。

「ああ…大丈夫だ。約束するよ。だから、お前も無事でいてくれよ。」

「うん。約束する。」

もう会話だけ聞いていたらバカップル丸出しな二人だが、二人は付き合っていない。

「とりあえずお前に謝っておく。」

「何？」

奈々は涙で濡れている目を修平に向ける。

修平はその顔を見た途端に理性が吹っ飛んで、奈々に抱きつきそうになった。が修平は踏み留まる。

「昨日は悪かった。勝手に居なくなったりして。もっと早く謝りたかったんだが、他の奴らがいて、近づけなくてな。」

すると奈々は俯いてしまう。

「？ 奈々？」

「本当に…心配したんだから！突然消えて…心配して…捜して…」

「悪かった。」

修平はそれしか言えない。

「でも、無事で良かった。」

また修平の理性は吹き飛びかける。

惚れた女にこんな顔されて、無事で良かったなんて言われたら…幸せで死んでしまうわーい！的な心境になったしまっ修平。

「奈々！」

修平はこのムードの中告白の決意をする。

その時、辺りの光が一瞬にして消え去る。

まるで修平と奈々だけが異空間へと飛ばされた様に。

そこに現れるは、昨日修平の前に現れた女性の姿。

奈々を守るように前にでる修平。

奈々は思わず修平の手を後ろから握る。
普段の修平なら嬉しさの余り変な事を口走っていただろうが、状況が状況である。

すると女性が笑いかけてくる。
構える修平。

「お前は何者だ！どうして俺の前に現れる？」

「私の名前？ 私は伊東 空。 何で現れる？あなたの事が羨ましいから。」

修平は意味がわからない。

「あなた知リたがつてた…真実を」

伊東 空と名乗った女性は修平を指差す。

「？」

相変わらず修平には理解できない。

「見せてあげる。真実。 フッフ…」

突然修平の中に何かが流れ込んでくる。

記憶…拓郎が何者かに襲われている。黄金に輝く槍を手にした青年は逃げ回る拓郎をただ笑っている…

「ガアアアアアアアアア！」

唸る修平。

「修平どうしたの！？修平！？」

修平には奈々の声でさえ届かなくなっていた。

…死にたくない。死にたくない。死にたくない。…拓郎は叫びながら、必死に逃げる。が追っ手の青年が槍を拓郎に突き刺す。

驚く事に拓郎からは血がでていない。しかし拓郎は悲鳴を上げる。

…助けて。親父…助けて。母さん…助けて…先輩…

修平の心は怒りで満ち溢れる。

そんな光景を前に伊東 空は語る。

「どう？それが真実。真実は苦しくて、悲しくて、辛いモノ…それでも貴方は真実を知りたいの？ 貴方の父親はそれを望んではない罪を背負って欲しくないから。」

「ガアアアアアアア！」

「そう…なら貴方にあげる。」

伊東 空はどこか嬉しそうに、そしてどこか悲しそうにそう言った。

「アンタ！修平に何したのよ！」

叫ぶ修平を心配しながら奈々は伊東 空に叫ぶ。

「また会つかもね」

伊東 空はそう言って、姿を消した。

それと同時に修平の中に流れる記憶が消える。

辺りに光が戻ってくる。しかし、そこは今まで修平がいた場所ではなく、見覚えのない場所。そこには謎の十字架を持った巨人と喜一の姿。そして…先程頭を駆け巡った記憶の中にいた黄金の槍を持った青年の姿が見えた。

修平の目には怒りしかない。

「ガッ」

コイツを殺してやる！真実がどうか罪がどうかどうでもいい！コイツを殺せるならどうでもいい！大事な後輩をあんなにされて赦せない。拓郎を襲ったあの男が！

その理不尽が！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

気がつくとも翼が生えていた。

天使の如く美しく、神の如く神聖で、罪人の背負う罪の如く重い翼を背負う修平はただ思う。

必ずコロシテヤル…

第3―6 後悔

あの時私は手を伸ばさなかった
伸ばせば何かを掴めたかもしれないのに

あの時私はただ見ていただけだった

何かしていればあの人は傷つかずにすんだのに

しかし

どうしても足が震える

ただ怖いのだ

手を伸ばしてもその先に何もないことを知ることが

何かしてしまったがためにあの人を傷つけてしまうことが

結局私はただ見てるだけ…

『第3―6 後悔』

怖い…

奈々はただそう思う。目の前で変な二人組が日常でめったに見ることのない武器のようなモノを持っていることも

今日転校してきた喜一と謎の巨人が一緒にいることも

修平から翼が突然生えたことも

自分が伊東 空と名乗った女性に謎の空間に飛ばされたことも

今修平から感じられる圧倒的な怒りの前にはとるに足らぬ事のように感じられた。

今この場にいる全ての者がこの怒りに恐怖している。

止めなくてはいけない…

奈々は自然とそう思った。

修平は自分の事ではめったに怒らなかった。ただ大事な人が傷つけられた時、修平は何時もの修平からは考えられないほどに怒りをあらわにしていた。

そんな時奈々が必ず修平を止めていた。

奈々が怒った修平を止めようと思ったのはその経験と反射である。止めなくては修平が修平ではなくなってしまうという。

「だめ！修へ…」

奈々の制止の声は途中で途切れる。

理由は近づいた奈々を修平から生えた翼が奈々を攻撃したためである。

「神山さん！！」

そう叫んだのは、その光景を見て我を取り戻した喜一。

奈々は信じていた。

修平はどんな事でも私の声だけは聞いてくれるものだ。

それは一見すれば奈々の盲信だが、奈々はそう信じていた。

しかし、奈々は気づくべきだった。

伊東 空と対面した時にはもう奈々の声は修平に届いていない事に。

「しゅ…へい」

余りの衝撃に意識が飛びそうになりながらそれでも奈々は修平の名をよんだ。

自分の声が修平に届くと信じて…

だが、修平は振り向きもせず前に進む。
目の前の敵に向かってただ、ただ歩く。

変わりに奈々の元に駆け寄ったのは喜一だった。

「修平…を止め…なきや…！」

途切れ、途切れに

でも強く喜一に訴える奈々。

「わかってる！アイツは俺が止めるから！」

喜一は瞳に強い光を写しながら奈々にそう呟く。

惣太郎とまみはまだ動けないでいた。

恐怖が理由ではない。目の前に広がる光景を信じられないからだ。

惣太郎とまみはあの翼と似たようなモノを知っている。

しかし、それはこんなどこにでもいるガキが持つて良いモノではない。
い。

あれは…

突然まみの体が3メートルくらい吹き飛ばされる。

コンクリートでできた道に叩きつけられ、まみは痛みの余り動けなくなる。

今戦場の中心にいるのは二人。

修平と惣太郎。邪魔者は全て弾き飛ばされた。

「ハハハハハ！　どうやって手に入れたよ、その翼ア！」

惣太郎が槍で修平へと放つ。

しかし、槍は翼に止められてしまう。

替わりに反って来たのは修平が放った力の塊。

余りの力に惣太郎は堪えきれず道に叩きつけられる。

「ガッ」

口から血を吐き、悶える。

何が…起こって…？

惣太郎の思考がそこで途切れる。

修平が腕を横に振る。それだけで惣太郎は数メートル吹き飛ばされる。

「ガアアアアアア！」

余りの痛みに叫んでしまう。

惣太郎は何とか立ち上がる事ができた。

「調子に乗るなよ！クソが！」

惣太郎はボロボロの腕で槍を持ち、その切っ先を修平に向ける。

「ブツ刺せ！ロンギヌス！！」

槍は一瞬で距離を詰め修平に突き刺さろうとするが、翼にガードされてしまう。

だが翼は槍を止めきれず、修平は後ろに吹き飛ばされ道の端で奈々の傷の具合を見ていた喜一の横を勢いよく飛んでいく。

「修平！！」

喜一が叫ぶ。

…なんて力だよ。クソッ　隙を見てどうにかするってレベルじゃね

えぞ！…

所変わり上山公立公園。こちらでも激戦が続いている。

公園にはいくつもの戦闘の跡があり、その激しさを物語っている。状況は五分五分。だが2対1で戦っているため空のチカラの消費は激しい。

その時優夢に花村から頭に直接連絡が入る。「どうした！？花村」戦いながらも優夢は反応する。

まだ優夢達が戦っているのは花村には分かるはずだ…そんな状況の中で花村が連絡をとってくるということは何か大切な事なのだろう。

『惣太郎班に異変あり！まみからはシンボル反応が途絶え、惣太郎もギリギリな状況だ！さらに、そのすぐ近くにツバサの反応ありだ』

「上村 喜一か！？」

『いや、違う。ソイツとは別に突然ツバサの反応が現れたんだ！俺達からは距離がある。一護の力でアイツ等の救出を頼む！』

「クソッ！一護！！撤収だ」

「どうしてだよ！あと少しだぞ！」

「惣太郎達が危ない！助けなくては。」

「チッ！解った！」

二人は空から距離をとる。

「待て、逃げるな！喜一がなんだ！？アイツは関係ないだろ！」
空は叫びつつ追いかけるが、一護は剣で空間を引き裂き姿を消した。

クソッ

と喜一は罵声を呟く。こちらも修平と惣太郎の激戦が繰り広げられている。

喜一は修平を止めるため隙を伺っていたが、これでは戦いの中に入った途端にやられてしまう。

…俺の巨人の十字架にはアイツ等のチカラを無効にすることができ
る。それは昨日と今日で何となくわかる。だから修平を止められる
と思ったのに…

二人の戦いに一切入りこむことができない。やらなきゃいけないこ
とはわかってる。だが足が震えるのだ。

その時均衡していた二人の戦いに傾きが生じはじめる。

押し倒されたのは惣太郎。

追撃をかけるように修平が拳を振り上げる。

…ここだ！…

途端に喜一は震える足で駆け出す。

均衡した戦いじゃ入る余地はなかったが、一方的になればチャンス
がある。

そして今戦いの嵐がやみ、修平は喜一に対して後ろを向いている。

ガッ！！

巨人が修平の翼に十字架を突き刺した瞬間目映い光が発生する。

目映い光が消え、翼も消える。

一瞬静寂が世界を包む。

「クソがアアアアアアアア！」

惣太郎はその瞬間を見逃さなかった。槍を構え、攻撃の体勢をとる。喜一は修平を後ろに下げつつ、巨人の十字架で防御の体勢をとった。

「そこまでだ。」

突然惣太郎の手を掴み、攻撃を遮る。

正体は優夢だった。

後ろを見ると、空間に穴があいている。

「まみは意識がないし、お前も重症だ 退くぞ」

「まだだ！あの男を殺す！」

「だめだ。俺達の目的を忘れたか。誓ったろ。皆でって…お前が欠けることは赦さない。「くっ！わかったよ！」」

惣太郎は優夢に支えられ、空間の闇に消えてゆく。

「喜一離せ！アイツは…アイツだけは！殺さないと…」

修平は正気を取り戻したようだが、息も途切れ、途切れで明らかに無理をしている。

「落ち着けよ修平！無理だって！ケガもしてるし。神山さんだってケガしてるんだぞ！」喜一が必死に修平を止める。

惣太郎達の姿はもうない。

「奈々がケガ？アイツ等にやられたのか？クソッ！」
と言いながら奈々の姿を探す修平。

「違う！」

喜一は叫ぶ。

修平は動きを止め、喜一の顔を見つめる。

「どうゆうことだ？」修平の顔に焦りが見れる。喜一の声に落ち着きを取り戻し、記憶がはつきりしてきたのだろう。

「俺？俺が奈々を…」

修平は途方に暮れている。

「今は後悔してる時じゃねえ！まずは神山さんの状態を確かめに行くぞ！ほら！」

修平を無理矢理立たせ、奈々を探す喜一。幸い奈々とはすぐに会えた。

少し前に意識を取り戻し、光を見た奈々はフラフラになりながら向かってきていたのだ。

奈々は無事な修平の姿を見ると緊張がとけたのか、ガクツと膝をついた。

「大丈夫？神山さん！」

喜一がすぐに駆け寄り、その後に修平が続く。

「大丈夫…安心したら力抜けちゃって、修平は大丈夫？」

「ああ…」

修平はそれだけ言っつて口を塞いでしまう。

「修平…大丈夫だから…私は」

奈々は修平に心配させないように言っただけだが、その弱々しい言葉はよけいに修平の心に深く突き刺さる。

…やってしまった。また…。今日誓ったばかりなのに！俺は世界で一番大切な人を傷つけてしまった。俺は…

三人に突然ライトが当てられる。

眩しくて見えないが車のライトの様だ。

「まさか」

一度嫌な経験をしているせいで敵ではないかと緊張する喜一。

「よかった。居た。居た。はい。見つかりました。喜一君もいるし、三人とも一応大丈夫なようです。」

車から降りた影は誰かと喋りながら近づいてくる。声からして昨日のような殺気はかんじられない。

「村田さん？」

聞き慣れた声に奈々と修平が反応する。

その男は寮監の村田だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7579k/>

象徴 ～シンボル～

2010年10月28日05時20分発行